

英國軍艦勇者列伝3

Legend of British Fighting Ships 3

岡部 いさく

Written by Isaku OKABE



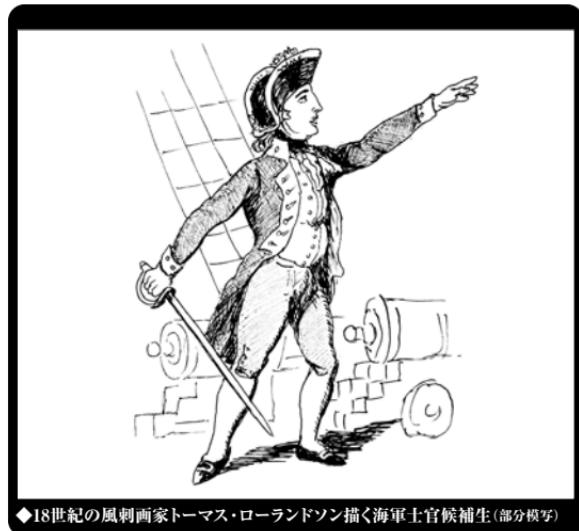
英國軍艦勇者列伝3

Written by Isaku OKABE

Legend of British Fighting Ships 3

岡部いさく

大日本絵画



◆18世紀の風刺画家トマス・ローランドソン描く海軍士官候補生(部分模写)

ブルータス「おおよそ人のなすことには潮時というものがある、一度その差し潮に
乗じさえすれば幸運の渚に達しようが、乗りそこなつたら最後、この
世の船旅は災難つづき、浅瀬に突きこんだまま一生うごきがとれぬ。」

——シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』IV幕3場(福田恒存訳)

「荒涼たる海原に罂粟の花が揺れることはなく、整然と並ぶ十字架もない、

そこに若き心が眠る…波の下に…洗剣とした者 善良な者、勇敢な者、

しかし星々は変わることなく夜を徹して見守る、水底深く横たわる者たちを」

——アイリーン・マホニー『深き水底』より抜粋(拙訳)

「さあ来い、その意気だ、者どもよ、

栄光へと我らは舵を取る」——イギリス海軍行進曲『ハート・オブ・オーク』より抜粋(拙訳)

序

岡部さんは知識だけでなく、魅力もいっしょに教えてくれる人—— 笹原 大

軍事評論家といえばお硬い感じで難しいことばかりお話される人というイメージですが、岡部いさくさんは実際に会つてお話をするとフレンドリーで優しい方なんです。僕は最初は岡部さんは軍艦というより飛行機に詳しい方という認識でいました。『月刊モデルグラフィックス』は以前から読んでおり、岡部さんはまず『世界の駄つ作機』の方だという印象が強かつたんです。ミリタリーに詳しい人とお話することはあるんですが、そういう方の知識ってたいてい専門のジャンルが決まっていて、「戦車だけ」「飛行機だけ」「現用兵器だけ」とか細分化されていると思うんです。しかし岡部さんの場合は飛行機も軍艦も、第一次大戦のものも詳しいし、現用のものも詳しいというのがすごいなって常々思つていました。一度静岡ホビーショーで『世界の駄つ作機』シリーズの単行本の発売記念サイン会でサインしていただいたのはいい思い出です。

岡部さんが書かれているものの印象ですがよくこんなマニアックなネタを探してこられるな、博識な方だなと思いつつも記事を読ませていただいています。親しみやすい調子の文章もそうなんですが、僕はなんと言

つてもイラストが好きなんですね。巷にあふれる最近のイラストはCGが多いですね。CGイラストも最初に見たときは「すごいな」って思つたりもしたんですが、最近は見慣れてしまつたせいか手書きのイラストのほうがあるがつていいなつて思うようになりました。岡部さんのペン画のイラストは柔らかいタッチで、しかもそのメカの特徴を誇張して描かれているので、よく知らない兵器でも「あ、これはこういうものなんだな」って一目で理解することができるんです。これは描かれている岡部さんが兵器の本質的な部分まで見抜かれていてその特徴を抽出して描かれているからなんですね。周りにそえられている手書きの文字も優しく語りかけてくれるようで親しみやすいです。著書にサインをいただいたときには「なにかイラストを描きましょうか」と聞いていただけで「先生におまかせします」って伝えたら「そういうのがいちばん困るんですね」っておっしゃりながらサラサラサラっと可愛い飛行機のイラストを描いていただきました。あとで知ったんですが描いていただいたのはフェアリー・ガネットというイギリスの艦上対潜哨戒機でこういうマイナーな飛行機のチョイスも岡部さんらしいなと感じました。

取り上げる題材が王道ではないもの、零戦とか大和とかタイガー戦車ではなく、メジャーなものではないけど、実はこんなにおもしろいんだよっていうものを取り上げてくださるのもいいですね。『ネイビーヤード』の連載記事「なんだか蛇の目のフネだから」で取り上げられる艦船も戦艦や空母といった主力艦は少なくて、駆逐艦とかフリゲートとか潜水艦とかあまり日の当たらない艦が多いような気がします。このあたりの英国の軍艦はそんなにプラモデルのキットが多いわけじゃないから、勉強になります。ミニアックなようで英國の軍艦ファンつて意外に多いんですよ。

僕自身は太平洋戦争中の日本海軍の軍艦の模型を中心に製作しています。ただ日本海軍の軍艦のルーツは英國

海軍の軍艦にあると思つています。戦艦だと金剛型はご存知のとおり英國で設計してもらつたものですし、長門型以前の戦艦は大なり小なりイギリス海軍の戦艦の影響を受けていますよね。最後の大和型戦艦だつて塔型の艦橋はネルソン級やキング・ジョージV世級の影響を受けているんじやないかなと思つています。今のところ自分の制作計画にはないんですが、もし英國海軍の軍艦を作るならばプリンス・オブ・ウェールズとか日本海軍にゆかりのある戦艦にチャンレジしてみたいですね。迷彩塗装は難しそうですが。あとは空母。アーノルディヤルとかイラストリアスとかもおもしろいかな。宮崎駿監督の『雑草ノート』（大日本絵画刊）に英國海軍の空母が出てくるお話があつたじゃないですか。架空の特設空母安松丸が英國の装甲空母に魚雷を命中させるお話。僕は以前、安松丸を作つたことがありますので、そのときの敵役としてイラストリアスは作つてみたいと思つていました。飛行甲板に複葉雷撃機のソードフィッシュがずらりと並ぶなんて絵になると思いませんか？

僕が英國海軍の軍艦の模型を実際に作るとしたらポンポン砲なんかを作り込んだりしたいです。日本海軍では対空火器として25mm機銃なんかが搭載されています。僕は25mm機銃については組み立てるのは大変でもエッチングパーツのものを搭載するようにしているんです。それがいちばん実艦のイメージに近いと思うから。25mm機銃はすでに技法や使うパーセントは確立されているのだけど、ポンポン砲とかは新たなチャレンジになりますね。今なら3Dプリントパーセントで出来のいいものがあるかな。他の機銃は米国海軍のものと同じもののケースが多いですね。そちらはエッチングパーツがあるのでそれを利用すると思います。あとは英國海軍の特徴を模型で表現するとしたら色についても勉強したいですね。大西洋の英國海軍つてちょっとくすんだ青とか灰色とかが使われているイメージが強いです。落ち着いた色合いでですね、日本海軍の塗装とは全然違います。これをかっこよく見せにはどうしたらいいのか、こだわって試してみたいですね。もちろん艦上機の精密ディテールアップもやつて

みたいです。複葉機だと張線とかの情報量が多いので並べるとかっこいいと思っています。そういうふた軍艦の装備や迷彩についても岡部さんには教えてほしいです。

『ネイビーヤード』の連載ではこれからも僕の知らない英國海軍の軍艦を紹介してほしいです。誰もが知っている有名な軍艦ばかりではなく、「こんな魅力があるんだよ」というお話を聞きたいです。そういう知識が模型という趣味をより豊かにしてくれると思うんですよね。

笹原大 ● ささはらだい

1969年生。千葉県出身。中学生までガンプラをメインに楽しんでいたが、高校入学と共に製作活動を休止する。サラリーマンを約20年経験後、転勤のない現在の仕事に就いたため、家族の了解もあり模型製作を再開。現在、艦船模型専門誌『ネイビーヤード』をメインに1/700スケールの日本海軍艦艇製作に特化した模型ライフを楽しんでいる。二児の父親。ブログ名R&R工廠の由来は子供の名前のイニシャルから命名。著書として『笹原大の艦船模型ナノ・テクノロジー工廠』『R工廠 超巧造艦ワークス 笹原大 1/700艦船模型集』(いずれも大日本絵画刊)がある。

目次 CONTENTS

序…… 固船といふは知識だけではなく、魅力もつゝしょに教えてくれる人………… 笹原大………… 3

BFS001	強くやなぐ、速くやなぐ…………	条约型巡洋艦…………	9
BFS002	始まりのA…………	A級駆逐艦(前編)…………	21
BFS003	戦いに艶れ、戦い続け…………	A級駆逐艦(後編)…………	31
BFS004	最初の超弩級…………	オワイオノ級戦艦…………	41
BFS005	北岬、ノルマンディ、ペナノ沖…………	G級駆逐艦…………	53
BFS006	長く数奇な戦歴…………		65
BFS007	巨砲の軽巡…………	カレイジャス級大型軽巡洋艦…………	77
BFS008	2度沈んだ潜水艦…………	T級潜水艦(前編)…………	89
BFS009	球磨と足柄を沈める…………	T級潜水艦(後編)…………	101

BFS010	タイマーへの攻撃	113	ハルシオン級掃海スループ	113
BFS011	○セカナダの○	125	○級駆逐艦	125
BFS012	「建物つせむ」に轟く	135	戦艦クイーン・ヘンリーカバグス(前編)	135
BFS013	マイマーの勇者たち	145	戦艦クイーン・ヘンリーカバグス(中編)	145
BFS014	この世界の場所にした	155	戦艦クイーン・ヘンリーカバグス(後編)	155
BFS015	英國初たけど英米混血	165	原潜マーチャーテ	165
BFS016	ナルヴァイック殴り込み	175	エ級駆逐艦(前編)	175
BFS017	ジボーネーの死闘	187	エ級駆逐艦(後編)	187
BFS018	アドミラル勢は決して	199	カースル級フリゲート	199
BFS019	ポークとペイン	209	D級駆逐艦	209
BFS020	時代遅れのビッグキャットたち	221	タイガーフロッグマー	221
BFS021	ウォッチャー・オフ・ザ・スカイズ	233	タイガーフロッグマー	233



強くもなく、
速くもなく

条約型巡洋艦

"County" class cruisers

1928年～1959年

基準排水量：1万0570トン
満載排水量：1万4200トン
全長：192.0m
幅(バルジ含む)：20.8m
喫水：5.3m
機関：ボイラー 8基、ギアードタービン8万0000shp、4軸
速力：31.5ノット
航続距離：10ノットで8000カイリ
兵装：8インチ連装砲×4基
4インチ連装高角砲×4基
2ポンド8連装対空機関砲(ポンポン砲)×4基
12.7mm4連装機関銃×8基
航空機：1機
乗員：685名
(データはケントの改装後)

イギリス海軍の1万トン級巡洋艦第1陣
ケント級のネームシップ、HMSケント。

1931年の浮。乾舷の高い平甲板。

日本やアメリカの重巡は船体重量を
軽くしようと、甲板を波打Tにせた。

ロングフォクスル型にしたけど、イギリス海軍
は航海性を確保するため
こういう船体にした。

ケント級には
バルジがついてる。

1930年秋、竣工したばかりの
1万トン級巡洋艦最終型の
HMSドーセットシャー。

こうして見ると、ケントとほとんど
変わらない。艦橋の形
が多少違う、砲塔は
改良型のMK.IIだ。

ケント級と
ロンドン級じゃ、4インチ
単装高角砲は、煙突
後方のプラットフォームに
置かれてたけど、
ドーセットシャー級じゃ
煙突脇に成了った。

3本の煙突を軽く
徐々に傾させてるのは、
第1次大戦直前の
アレシーサ級や
前期C級軽巡
に似てる。

第3煙突後方の
折りたたみ式カタパルト
に載ってるのは、どうやら
フェアリー・フライキャッチャー
戦闘機のフロート装備型みたいだ。

日本やアメリカの重巡は、クラスごとにいろいろ変わった、「いや、もとと！」。
「こうじゃなくて！」と次々に改良されていったのに比べて、イギリスの

「Aタイプ」巡洋艦は、大きさも兵装も配置も3クラスともほぼ同じ。「カウンティ級
第1・第2・第3グレード」と言い方をしないのはなぜなんだろうな。寸法を比べると、
ケント級は全長192.0m×幅20.9mで、ロンドン級とドーセットシャー級は寸法が同じで、
全長192.8m×幅20.1mとケント級よりちょっと細長い。

軍縮条約と列強海軍巡洋艦事情

第2次世界大戦を戦つた各国の重巡洋艦つて、そのほとんどは1922年のワシントン条約の制限の下で作られた艦で、つまりは基準排水量1万トン、主砲口径8インチ（約20cm）とかの条件のなかで、いろんなところを妥協してゐる。結局望む性能と装備は1万トン以下じゃムリそう、と考えた海軍はこつそり1万トンの制限を破つたりしたんだけど、なかには律儀に制限を守つた海軍もあつた。

イギリス海軍はもちろん律儀な方で、そもそも1万トンの排水量制限も、主砲8インチつていうワシントン条約の制限も、実はイギリス海軍が第1次大戦中の1915年に計画した、当時としては大型の巡洋艦ホーキンズ級が基になつてた。ホーキンズ級は排水量が約9800トンで、主砲は7・5インチ（19cm）単装砲が5門、29・5ノットという速力だつた。

イギリス海軍としては、条約後の世界の巡洋艦の大きさとしては「このぐらいが上限でいいんじゃないの？」と言いつつ、せつかく作つたホーキンズ級を条約で廃艦にされたくはなかつた、という気持ちもあつたのだつた。こうして各国が巡洋艦の大きさと火力の条件に合意しても、じゃあその巡洋艦でどうするかは各国いろいろ考えがあつた。イギリス海軍としては、なにしろ大英帝国の植民地が世界中にあつて、それを結ぶ海上通商路を守らなくちゃならないから、巡洋艦は航路の保護や艦隊戦のときの警戒が主な任務となる。

その点、アメリカ海軍や日本海軍は、巡洋艦は太平洋での艦隊決戦のときの戦艦部隊の補佐役にするつもり

だつたし、とくに日本海軍は主力艦の数をアメリカとイギリスに比べて少なく制限されたから、その劣勢を補うためにも巡洋艦は重武装にしたくて、結局条約型巡洋艦第2陣の「妙高」型じゃ排水量を超過しちゃう。アメリカ海軍も砲力を重視して、第1陣のペンサコラ級は8インチ主砲の連装×2基と3連装×2基の10門装備にしたけど、それとともに条約の制限を眞面目に守り過ぎて、ペンサコラ級はトップヘビーで動搖の大きいヘンなフネになつちやつた。イタリア海軍はどうせ地中海で行動するだけなんだけど、なにしろイタリア半島の西と東で艦隊を素早く動かさなくちやならなくて、その巡洋艦は速力重視で排水量は制限を超過していた。イタリアにつられてフランスも速力重視の巡洋艦を作つたのだつた。

イギリス海軍の1万トン級重巡カウンティ級

その点、イギリス海軍の条約型巡洋艦第1陣のケント級は、基準排水量1万トンで、実質はわずかに余裕を残して9942トン、主砲は8インチ連装砲塔×4基の計8門、4連装魚雷発射管×2基、4インチ単装高角砲×4門、4連装ポンポン砲×2基、索敵や哨戒のための航空機を1機搭載、速力は31・5ノットというものだつた。基準排水量の制限があつて、そのなかで然るべき砲を装備して、速力もそれなりに出さなくちやならないと、当然装甲防御は犠牲にしなくちやならなくて、前後の主砲弾庫部分と中央部の4インチ高角砲の弾庫部分には一応の防御が施されたけど、それ以外の防御はごく薄かつた。それでも飛行機からの爆弾に対する防御

も考えられていた。あとケント級では中央部の水線下にバルジが設けられた。ボイラーは8基4群で、中央の2群の煙突を1本にまとめたから、煙突は3本だ。それが同じ角度で後傾してゐるところは、イギリスの軍艦らしい几帳面な設計だな。機関出力は8万馬力で、推進器は4軸だ。航続距離は12ノットで1万3300カイリ。これで1万トン以下に収めるために、やっぱり構造重量をいろいろ削つて、甲板の木材も重いチーク材をやめて、もつと軽いモミ材を使つたりもした。

こうしてみるとケント級巡洋艦は、砲力では日本の「妙高」「高雄」型やアメリカのベンサコラ級の10門、あるいはアメリカのその後の巡洋艦の3連装×3基の9門に劣るし、イタリアのトレント級やフランスのデュケーヌ級、日本の「古鷹」型や「妙高」型の34～35ノットには及ばない。防御はイタリアとフランスが極端に薄弱で、日本とアメリカ、イギリスはそれよりはましだつたけど、まああんまり強固なもんじゃなかつた。それを考えるとイギリスのケント級には他国の条約型巡洋艦より勝つてゐる部分がないように見える。

でもイギリス海軍にとつちや、ケント級はホーリンズ級よりも火力は大きく増えてるし、速力だって速くて、その点では充分に作る意味のある巡洋艦だつたのだ。それにイギリス海軍は巡洋艦は外洋で長期間の哨戒に働くから、ケント級では荒い波でも航行できるように乾舷を高くして、艦首にはナックルをつけた。当然艦内容積も大きいから、居住区画も広く取れる。実際にケント級巡洋艦ができると、航海性が優れていて、海が荒れても甲板は波をかぶりにくく、動搖も少なかつた。1928年に南米に長期航海に出たコーンウォールの艦長は、航海中に荒天に遭遇したけど最大傾斜は18度だつたと書いてるくらいだ。同

じ条約型巡洋艦でも、アメリカのベンサコラ級ソルトレーキ・シティなんか、中程度の波でも傾斜が40度になつて、しかも動揺周期が10秒と短かつたんだそうだ。ケント級はそんなわけで乗員にも評判が良くて、暑い海域での居住性も良好だつた。

とはいえてケント級にも難点はあつて、艦尾の方で振動が出やすいともいわれて、これはまあ後に補強してなんとかなつた。乾舷が高いのも善し悪しで、魚雷発射管が甲板上にあつたから、魚雷が海面に落ちるときの衝撃が大きくて、魚雷が壊れるという問題もあつた。これは魚雷を強化して、落下角度を緩くすることでなんとかした。また新設計の主砲、8インチ50口径砲M.k. VIIIとそのM.k. I連装砲塔がやつぱり思つてたほど扱いやすくなくて、1門あたりの発射速度は要求の毎分12発には遠く及ばず、がんばつて毎分5発、持続的には毎分3～4発が精いっぱいだつた。それとイギリス海軍は伝統的に露天艦橋だつたんで、艦橋が吹きさらしで寒いというのは、まあ仕方なかつたかもしれないな。

イギリス海軍はワシントン条約の締結当時、他の国の海軍よりも優位に立つために、それに長い海上通商路を守るために、70隻の巡洋艦が必要と考えて、そのうち17隻を1万トン級の巡洋艦にしようと思つてた。本當は軍備予算も限られてる（だからワシントン条約で戦艦の建造を制限しようと思つたわけだし）なかで、大型で建造費の高い巡洋艦を何隻作るべきなのは難しい問題だつたんだけど、1922年に日本が条約型巡洋艦8隻の建造構想を示して、アメリカもそれに対応しようとしたんで、イギリスもそれなりの数を建造しなくちやならなくなつた。

そこで1924年度計画で5隻＋オーストラリア海軍向けに2隻を建造することにしたのが、条約型巡洋艦第1陣のケント級だった。ベリック、サフォーク、コーンウォール、カンバーランド、ケントの順に1924年9月～11月に起工して、1925年3月と5月にオーストラリアとキャンベラが起工、竣工は1928年1月～7月にカンバーランド、ベリック、オーストラリア、コーンウォール、サフォーク、ケント、キャンベラの順だった。どつちにしてもケントが1番艦じゃないんだけど、海軍省が計画時に「ケント級」と命名しちゃつたんだからしようがない。

でも1924年になるとイギリスじや労働党政権になつて軍備予算はさらに削減されて、17隻の建造は無理っぽくなってきた。1925年度計画では、前年より1隻減つて4隻が建造された。これがロンドン級で、バルジを止めて、防御を見直し、B砲塔が発射したときの爆風の影響を減らすために艦橋をちょっと後ろに下げたりして、全長もわずかに長くなつた。ロンドン級は1926～1927年に起工されて、1929年1月～9月に、ロンドン、デヴォンシャー、シユロップシャー、サセックスの順に竣工した。

翌1926年には、予算の制約で1万トン級は2隻のみが建造された。砲塔が改良型のM.k. IIになつて、防衛が多少強化されて、カタパルト位置がちょっと前になつて、4インチ高角砲の位置も前進したぐらいで、ほとんどロンドン級と同じだった。これがドーセットシャー級で、1927年に起工されて、1930年に竣工したけど、起工も竣工も2番艦ノーフォークの方が先だつた。

このようにイギリスの条約型巡洋艦は、ケント級7隻～ロンドン級4隻～ドーセットシャー級2隻の13隻が

1930年までに揃つた。どれもイギリスの州「カウンティ」の名前がつくから、総じてカウンティ級ともいふし、どれもほぼ同じような艦だから、みんなまとめて「ケント級」といつたりもする。

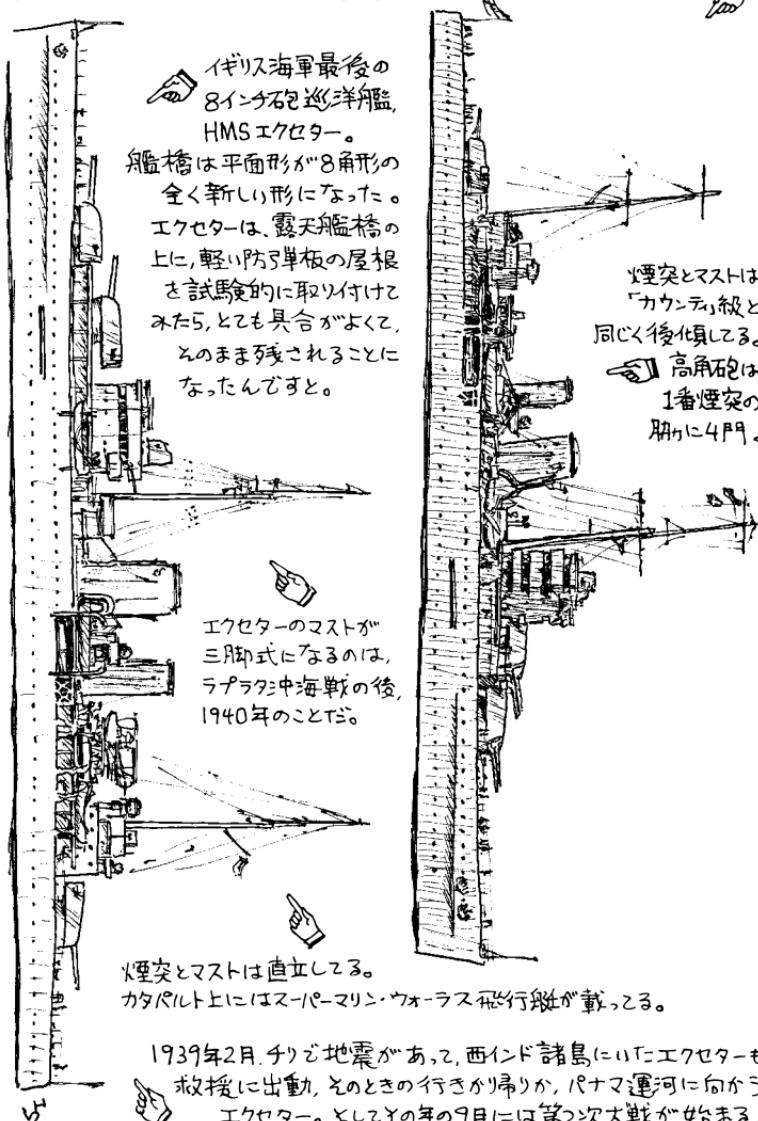
同じ条約型巡洋艦でも、日本やアメリカはクラスごとに大きく改良されていったけど、イギリス海軍はほぼケント級と同じような艦を建造してゐる。ケント級で納得がいったのか、あるいは予算の制約で、あんまり大幅な改設計をして費用がかかるのが望ましくなかつたのか。

それでもイギリス海軍は、日本の「妙高」型が20cm砲連装5基の10門を装備するのを知つて、1927年に連装砲塔5基、前部3基と後部2基の案と、前後に2基すつ中央部に1基の案を検討したことがあつて、煙突は2本にまとめるつもりだつたけど、やつぱり連装砲塔4基で、防御を強化、重量軽減のために艦尾甲板を一段下げた設計で、1929年計画で2隻、予定艦名サリートノーサンバーランドを建造するつもりになつたけど、1930年に予算の制約で中止になつた。

節約型重巡「Bタイプ」

それほど厳しい予算の下、なんとか巡洋艦の数を揃えようと、イギリス海軍は1926年計画では、ドーセットシャー級と8インチ連装砲塔を3基の6門にして小型化した「Bタイプ」巡洋艦1隻を発注した。これに

「Bタイプ」巡洋艦 HMS エクセター。1933年7月の名。竣工当時、フォクスル部や船の側面は船橋下ままでしかよこがれてながたにしだけけど、このころには改修されて1番煙突の下ぐらいままでよこがれた。エクセターは車量カタパルトをB砲塔の上に載せるつもりだったんだが、船橋が高い。



対して大きいカウンティ級は「Aタイプ」と呼ばれることになった。

これがヨークで、計画段階では、船体が短いんでカタパルトはB砲塔の上に載せるつもりで、それでも前方視界を確保するためには艦橋も背が高くなつた。だけど考えてみたら装甲の薄い砲塔じやカタパルトの重さが支えられないんで、やっぱり艦の中央部にカタパルトを置くことにした。そこで艦橋は次のエクセターみたいな形にしようとも考えられたけど、建造が進んで改設計は間に合わなかつた。ヨークは1927年に起工されて、1930年に竣工した。

同じく「Bタイプ」巡洋艦が1928年計画でもう1隻建造された。ヨークの反省から設計は改められて、とくに艦橋は張り出しや露天部があると、それだけ気流が乱れて不都合が多いため、思い切つて8角形の単純な箱型にされ、煙突も直立型になつた。これがエクセターで、この艦橋の形はすぐ後のリアンダー級軽巡にも採り入れられることとなつた。

エクセターは1928年に起工、1931年に竣工して、イギリス海軍最後の8インチ砲巡洋艦になつた。このあとイギリス海軍は6インチ砲の軽巡の建造を進め、さらには8インチ砲8門よりも、発射速度も弾数も投射重量も大きくなるとして、6インチ3連装砲塔4基12門のサザンプトン級（タウン級）巡洋艦を建造する。エクセター以後、イギリス海軍が8インチ砲の巡洋艦を建造することも、計画することもなかつたのだ。エクセターは巡洋艦としては、ワシントン条約の制約と予算の制約の下で決して強力でも高速でもなかつたけど、フネとしてなかなか上出来で、動搖も振動も少なかつたそうだ。

「Aタイプ」巡洋艦の艦名は州＝カウンティの名前だったけど、「Bタイプ巡洋艦」のヨークもエクセターも都市名で、「シティ」級と呼ばれることがある。またどちらも大きな聖堂のある都市なので、「カシードラル（聖堂）」級なんていう呼び方をされることもある。

これらイギリス海軍の条約型巡洋艦、13隻の「Aタイプ」と2隻の「Bタイプ」が第2次世界大戦でどう戦つたかは、またのお楽しみ、ということで。



COLUMN

イギリス海軍の戦後史①

終 戦 後 の 戦 い

1945年8月15日に日本が連合国に降伏し、

第2次世界大戦が終わった。大戦でイギリス海軍は英連邦も含めて主要艦艇431隻を失い、イギリス海軍の戦死者は5万1500人にのぼった。これだけの犠牲を払ってイギリス海軍は勝利を得たのだが、手に入れた平和は長く続かなかつた。ソ連を中心とする共産主義諸国と、アメリカ、イギリスなど自由主義諸国との間の対立は、すぐに新しい緊張を作り出すこととなつた。

1946年5月15日、バルカン半島の共産主義国アルバニアの南端と、その西側のギリシャ領ケルキラ島の間の狭いコルフ海峡を航行していたイギリス海軍の巡洋艦オライオンとシップは突然アルバニアの陸上砲台からの砲撃を受けた。砲弾は両艦には命中せず、死傷者もなかつたが、イギリスはアルバニアに抗議し、謝罪を求めたが、アルバニア政府はイギリス艦が領海に侵入したと非難した。

それから5ヵ月後の1946年10月22日、イギリス海軍は国際法上の「無害通航権」を行使することを目的に、巡洋艦モーリシャスとリアンダー、駆逐艦ソーマレズとウォーレージにコルフ海峡を航行させた。コルフ海峡には機雷はないはずだったのだが、実はその2日前にアルバニアの要請でユーゴスラビア海軍の敷設艦が機雷を敷設していた。その機雷にソーマレズが触れ、ソーマレズは火災を起こし航行不能となった。そのソーマレズを後続の

ウォーレージが曳航してケル

キラ島に向かおうとしたが、今度はウォーレージも触雷、艦首を失ってしまった。これで両艦合わせて43名が死亡し、どちらの艦も沈没は免れたものの、ソーマレズは修理しても引き合わないとして除籍されてしまった。

第2次世界大戦ではシャルンホルストと戦い、羽黒と戦ったソーマレズはこうして軍艦としての生涯を終えたのだった。ソーマレズとその同型艦S級駆逐艦について本書のFile No.5

を参照してください。

この後の1946年11月に、イギリス海軍はアルバニア政府の合意なしにコルフ海峡のアルバニア領海を掃海、機雷を持ち帰つた。その機雷を証拠にイギリス政府は12月にアルバニア政府の砲撃と機雷敷設を非難、賠償を求めたが、アルバニア政府は機雷は第3国が敷設したものでアルバニアはあずかり知らぬことと拒否した。イギリスは国際司法裁判所に提訴して、イギリスの言い分が認められ、アルバニアはおよそ200万ドルの賠償を命じられたが、アルバニア政府はこれを無視した。結局賠償金が支払われたのは、イギリスとアルバニアが1991年に国交を結んで、1992年にコルフ海峡事件で和解した後のこととなつた。

こうしてイギリス海軍は第2次世界大戦終結の翌年には早くもコルフ海峡で新しい戦いを経験した。共産主義陣営と自由主義陣営の対立は大規模な戦争に至らない“冷たい戦争”、冷戦と呼ばれることとなつたが、両陣営が直接向き合う現場では、実際に軍艦が傷つき将兵が死ぬ戦いでもあったのだ。さらに1949年には中国の国民党政府と共産党の人民解放軍の戦いに巻き込まれて、スループ艦アメジストが揚子江で人民解放軍の砲撃で損傷、死者を出したうえ、アメジストと乗員が拘留されるという事件があった。アメジストはその後、夜陰に乘じ、客船に似せた灯火を点して脱出に成功している。

ソーマレズはこれで全損となつた。



ソーマレズを曳航しようとしてウォーレージも触雷、艦首を失つた。

これは後進ごとくに入港するところ。



25



9784499234351



1920076034008

ISBN978-4-499-23435-1

C0076 ¥3400E

定価[本体 **3,400** 円+税]



英國軍艦勇者列伝 3

Legend of British Fighting Ships 3

Written by Isaku OKABE